

“Tübingen” 報告

義歯（入れ歯）診療室 金 田 恒

この度、2003年10月1日より1年間、文部科学省在外研究員としてドイツ連邦共和国の南に位置します Tübingen 大学歯学部補綴学講座の Weber 教授のもとで主にインプラントの臨床について勉強させていただきました。Tübingen は人口8万人ちょっとと小さいながらも古きよきヨーロッパの佇まいを残す、きれいでかわいらしい町です。ネッカー川が町なかを流れていて、プラタナスの並木が繁る大きな中洲があり、町のシンボリックな存在となっています。

Tübingen 大学はドイツで2番目に古く歴史ある大学で、大学を中心に町がなりたっています。昨今は新しい校舎の建設・移転で町の中心から郊外、山の中腹までといたるところに校舎があり大学の中に町があるとも言われています。歯学部はダウンタウンにあり、とてもシンプルに保存、補綴、外科、矯正の4講座しか存在しておらず、各講座の外来・研究室が5階建ての校舎の各階に（1階は受付です）、インプラントクリニックは別棟にあります。基礎学問の講座は各関連臨床講座に属し、臨床での疑問を基礎的に検証、その結果を臨床にフィードバックするという形でとても臨床に密接に結びついています。基本的にドイツの治療室は個室で、インプラントクリニックには他

に比べてちょっと大きいメインの治療室を始め、計5部屋あります。ここはインプラントシステムの1つ、現在のフリアデント²の元となったチュービンゲンインプラントが開発された大学でもあります。退官されていますが、抜歯即時人工歯根として開発を行った歯周外科講座教授の Shulte 教授とたまたまお会い出来たことは嬉しい出来事でした。

さて同じ大学病院とはいえ、国の事情が異なるので仕方のない点も多々ありますが、羨ましく手本としたいことがたくさんありましたのでいくつか紹介します。

まずインプラントクリニックとして治療エリアが確立していること。そして手術・治療に必要な器具・器械の豊富なこと。予備の滅菌済み器機・材料が常に豊富にあることは本当にこうあるべきと痛感させられます。余力をもった環境こそ早急に整えなければならない課題だと実際現場で診療にあたっている人は痛切に感じていると思います。

そしてスタッフが充実している点。ここには常在の歯科衛生士が10人近く、そして実習生が数名おり、インプラント手術準備、後片付け、手術介助、器具管理、滅菌、次回の予約業務、メンテ



図1 ネッカー橋からの眺め



図2 Prof. Dr. Schulte(左)、OA. Dr. Gomez(右)と



図3 豊富な予備材料とスタンバイの様子。患者さん&ドクター待ちです

ナンスの評価等々その仕事はすばらしいものです。

ここでは1日に多い時には5、6件のope.を毎日こなし、年間1000人近くのインプラント患者さんの診療にあたっており、メンテナンスもきちんと行われています。患者さんの口腔内への意識の高さも特筆すべきことです。そしてメンテナンス時にチェックすべき要項がフォーマットされており、これがクリニックの秘書さんらによってコンピューターに入力され、データベース化されています。ちなみにクリニックの秘書、教授の秘書、コンピューター専任技師（スライドや学会・講義等のプレゼンテーションのためのグラフィックを作成するプロです）、と非常に合理的なスタッフ揃いで、うちもそうだったら…と切実に思われる先生方も相当数と思います。

今回の歯学部ニュースの発刊が春と聞きましたのでここでその時季の名物をご紹介しますと思います。写真中の露店で売っているものは何かおわかりでしょうか…？

これはアスパラガスです。ドイツだけでなくヨーロッパで、春を象徴する食べ物です。収穫の時期が厳格に決められていて4月の下旬から6月の何日だったか忘れましたが、聖ヨハネ祭の日までで、その日を境に市場から姿を消します。地物、朝取り、と新鮮なものが市に並び、日本人にとっての筍みたいな感じでしょうか。白アスパラガスがメインで食べ方はいろいろですが、オーソドックスなのは、茹でてホルンデースという黄色いソースをかけて食べるというスタイル。このソースの味をとえるならば、酸味のないマヨネーズ…クリーミーなこってり味ですがとても美味しいのです。この時季にドイツに行かれることがありましたらぜひお試しください。

最後になりましたが、このような機会をお許し下さり送りだしていただいた河野正司教授、教室の皆様をはじめ関係各位の方々にあらためてお礼申し上げます。ありがとうございました。



図4 これは何でしょう？



図5 とても大きく太く、堂々たるメインディッシュです